

(抄録)

研究課題名：岡山市における厚生運動(1938～1946)の受容と展開

—社会課及び厚生課の動向を中心に—

研究者氏名：関口 雄飛

管見の限り、岡山市の厚生運動に関する資料はほとんど見当たらなかった。したがって今年度は、そもそも大阪がなぜ第4回世界厚生会議(World Recreation Congress)の受け入れ準備に精力的に取り組んだのかを明らかにし、今後の課題として岡山市における厚生運動の受容と展開の一端を叙述することとした。

大阪が第4回会議の招致を推し進めた対内的な理由は、その誘致を端緒とした厚生運動を介して時局に則すべく府民を管理し、不振に陥っていた外国人を対象とする観光事業を活性化し得る絶好の機会だったことにある。ゆえに、大阪は、自らの財力を活かしつつ第4回会議の受け入れ準備に邁進したのである。そしてその対内的な理由は、第4回会議演技種目の採用基準にまで影響を及ぼしていたのである。

第4回会議が開催される筈であった1940年には、岡山市において市民の余暇を活用して生活刷新と心身鍛錬を図るべく岡山市厚生協会(以下、市厚協)が設立される。4月26日の発起人会では市関係者40名が出席、趣意書、会則、役員などが決定した。これを受けて市厚協は、「直に広く市民に呼びかけて」会員の募集に着手することとなった。事業としては、勤労報国精神の涵養、生活の刷新、その他厚生運動に必要なものが計画された。その足掛かりとして5月1日より春季ラジオ体操会が開催された。1年後の1941年5月17日には、深柢国民学校講堂で市厚協主催の「勤労者厚生の日」が開催された。催しでは、演技(ラジオ体操第一、二、三、日の丸行進曲、国鉄体操、舞踊体操、隣組と航空日本、歌と管弦楽、女子青年体操と愛国行進曲、工場体操と吉備舞、婦人従軍歌、厚生体操練習、管弦楽と独唱、剣道体操)と、映画鑑賞(『太陽を浴びて』、『岩と氷を踏んで』、『ハイキングの唄』、『月の宮の王女様』)が行われた。ただしその実態の解明は別稿に委ねることとしたい。